

いつもありがとうございます。きしゅう会計の名倉です。すみません。今月も事務所通信の発送遅くなり、11月より悪化！12月号はなんと月末になり、ついには年末年始合併号となってしまいました^^;



坊主も走る師走。忙しいのは確かにあるのですが、自由にできる時間が全くなかった訳ではありません。期限が遅れるのは忙しいことが原因でなく、性格が原因だと反省する次第です。ただ「今月号も遅いやないか！」とクレームが起こるくらい事務所通信も浸透していたらと思ったりしているのですが、( \_ \_ )。そんなこんなで、衆議院選挙も事務所通信 12月号を発行する前に終わってしまいました。大方の予想通り、与党の圧勝。「こんな時に解散するなんてありえない」等言われていた選挙ですが、解散権は首相にあるのでルールはルール。仕方ありません。日経新聞によると選挙開催のための費用は631億円。この費用を掛けてでも選挙をして良かったと思えるような今後の展開に期待します。でもまあ、ち



よっと難しいかな。ただ無駄な支出だと思えるこの支出もお金の流れ。誰かの所得になるのです。(選挙ポスターの掲示委託費や有権者への選挙案内の郵送料など等)。反対に一般的に賞賛される「節約」は誰かの所得を減らすことになるのです。個と全体。人の美德と経済の美德は違うようです。そここのところは本当に難しいですね。さて、今回はもっと分かりやすい問題点を考えてみましょう。投票率についてです。下の表をご覧ください。衆議院総選挙の前回までの投票率の推移です。そして今回の選挙が過去最低の52.66%！！注目すべきは20代の投票率の低さ。あの一、現状の単年度収支が足りなくて、国債を毎年発行して問題を先送りしている国家予算。若い人程将来の負担が大きくなる政治が展開されているんです。19歳までは選挙権がないのでしかたないですが(僕は例え0歳児でも選挙権を与えるべきだと思っています。例えば親が代理となればいい。でないと構造的に問題の先送りがなされてしまいます)選挙権のある若者には必ず選挙にいつてほしい。自分の1票では何もかわらない？そんなことありません。選挙の後、喜多川先生のFaceBookに次の書き込みがありました。

年	S.42	S.44	S.47	S.51	S.54	S.55	S.58	S.61	H.2	H.5	H.8	H.12	H.15	H.17	H.21	H.24
回	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46
20歳代	66.69	59.61	61.89	63.50	57.83	63.13	54.07	56.86	57.76	47.46	36.42	38.35	35.62	46.20	49.45	37.89
30歳代	77.88	71.19	75.48	77.41	71.06	75.92	68.25	72.15	75.97	68.46	57.49	56.82	50.72	59.79	63.87	50.10
40歳代	82.07	78.33	81.84	82.29	77.82	81.88	75.43	77.99	81.44	74.48	65.46	68.13	64.72	71.94	72.63	59.38
50歳代	82.68	80.23	83.38	84.57	80.82	85.23	80.51	82.74	84.85	79.34	70.61	71.98	70.01	77.86	79.69	68.02
60歳代	77.06	77.70	82.34	84.13	80.97	84.84	82.43	85.66	87.21	83.38	77.25	79.23	77.89	83.08	84.15	74.93
70歳代以上	56.83	62.52	68.01	71.35	67.72	69.66	68.41	72.36	73.21	71.61	66.88	69.28	67.78	69.48	71.06	63.30
全体	73.99	68.51	71.76	73.45	68.01	74.57	67.94	71.40	73.31	67.26	59.65	62.49	59.86	67.51	69.28	59.32

\*\*\*\*\*  
自分が一票を投じたところで世の中は変わらないから...  
という人は逆に自分に一票で世の中を決めてしまうことを望んでいるのだろうか もし、自分の一票だけで国民の行く末が決まってしまうのなら

その重みを背負える人なんていない  
自分の一票で自分の思い通りの世の中を作ることなんてできない。でも参加することで変えられることもある  
好みの候補者を当選させることはできなくとも自分たちのことを無視させないことはできる

もしも二十代の投票率が90%を超えるようなら各候補者は若者に受け入れられる政策を打ち出さざるをえない。そして、各政党は若者たちに訴えかける力を持つ必要があり、目先の利益だけでなく将来への明確なビジョンをしっかり掲げる必要があるだろう。そういう状況であれば立候補する候補者たちが今回と同じ顔ぶれでもそれぞれがもっと真剣に政策を考えなければならなくなる。それも、若い人たちにわかるように そして、若い人たちが納得できるような政策に。その中から選ばれる候補者であれば自分が支援する人でなくとも自分たちの世の代をしっかりと考えた政策を推進してくれるはずである。選挙によって選ばれた人たちが素晴らしい人たちなら、いい政治になるわけではありません。誰が選ばれようとも国民全員が参加するのが前提だからこそ選挙で選ばれた人たちが、あらゆる世代を無視できない、いい政治になっていくんです。

若い人たちが「どうせ自分が選挙に言ったって...」なんてでだっ子みたいなのをみんなで言っていると政策から無視され続けてしまいますよ。個人としての自分の意見を通してもらうためではなくみんなが「俺たちを無視させない！」という強い意志を持って投票にいつてほしいなあと思うんです。つまり、やはり選挙もみんなのために行くんですね。「参加することに意義がある」とはそういうことでしょう。

\*\*\*\*\*

喜多川先生はいつも、「勉強は自分のためにするものではない。これから出会う人を幸せにするためにする。つまり、自分のためではなく自分以外の人のために勉強はするんだよ」と主張されています。僕はこの考え方が好きなんです。親はついつい勉強しない子供に「自分のためなんだから」ついていってしまいますが、「自分のため」なら「勉強しなくても、その責任は自分が取ればいだけじゃん！」って理屈が言われた子供の頭の中で育ってしまいます。そして、手を伸ばせばすぐに届く楽しみばかり選んで、「自分の大切な時間」を使ってしまうものです。



来年の春には高校三年生になる息子がまだまだその状態真っ最中。勉強しないといけない理由を今後は真剣に家族で向き合っていこうと思っています。選挙もそうですよね。選挙にいかないのは論外です。「自分のため」ではなく、無視されないように、「みんなのため」に行かなきゃね。また人口減少、経済が小さくなる世の中。大きな経済成長を続けていた時代に作られた制度を変えて

いけないといけない状況。「増税反対！」「福祉向上！」など、「ああしろ！」「こうしろ！」と財源を考えず、要望ばかり言うお客様目線ではいけません。それを達成するために必要なことは我慢する決意や勇気も必要です。国民は国のお客様ではなく、日本の構成員なのでから。今はちょっとしんどい日本。でも前にもお伝えしましたが、素晴らしい歴史があります。よもやまかわら版 25号では教科書にしてほしいくらい、誇れる日本が好きになるお話を書きます！



新年あけましておめでとうございます！年末年始合併号のため少し早い年始のご挨拶でございます。表面でご案内させて頂いた通りここでは、もっと日本を好きにな

ってもらおうと思います。選挙の投票率の低さを是正するため、日本という国にもっと関心を持ってもらうため、もっと個人の存在意義、意思、行動の影響力を知ってもらうため、先月読んだ

「日本はこうして世界から信頼される国になった～12の歴史に秘められたジャパニーズ・スピリットの物語り～」から日本の誇れる歴史をいくつか紹介します。(この本は親子で読めるジュニア版なの



で全ての漢字にルビが振られています。大人になると逆に読みづらいますが、小学校低学年でも読めますので一家に一冊の家庭においてほしい本です)

1919年人種差別撤廃法案の提案

第二次世界大戦の前、世界の主役は白人で有色人種は奴隷である。そんな時代に、有色人種のなかで唯一近代化に成功した日本は、世界を驚愕させる提案を行ったのです。結局それが第二次世界大戦に繋がっていくのですが、...。その提案は国連でなされたものでした。国連の規約に、人種的差別の撤廃を明記させようという内容でした。提案国が、有色人種の国として唯一国連の

常任理事国となっていた日本だったという点に意義があるのです。「国連の盟約は、人種平等の原則が固守されるべきである」と、国際会議の場で世界に向けて堂々と主張したのです。その提案は多数決の結果、「17対11」の賛成多数で可決されたのです。

この可決は歴史の歯車をひとつの理想へと回転し始めると思われ

ましたが、議長であるアメリカ大統領のウィルソンがこう宣言したのです。「日本の提案は秘訣された」「このような重要な案件は、全会一致でなければ認めるわけにいかない」アメリカ国の社会の構造から受け入れがたい内容であったのですが、...。今では考えられないことですが、今からまだ100年も経っていない歴史的な事実なのです。後に1200万人の黒人が絶望的差別のもとで暮らしているアメリカの全米黒人地位向上協会は、次のようなコメントを発表。日本人の快挙を絶賛しました「われわれ黒人は、講和会議の席上にて、人種問題の法案について激しい議論を戦わせている日本に、最大の敬意を払うものである」結局この後戦争となり、敗戦国となったことから、全ての戦争責任が日本にあるよ



うな教育を受けてきた我々。このような誇れる歴史がひとつも載らない日本史の教科書が問題です。だいたい、タイトルから変です。日本

なのに「日本史」と、まるで他所の国の歴史のような名称。本来「国史」であるべきですよ。諸外国は全て国史となっているようです。



1905年日露戦争日本の勝利

日本が、日露戦争で勝利したことは歴史的快挙でありました。この勝利をきっかけに発展途上の日本が世界から認められたのです。今は国交が難しくなっている中国の前身である中華民国建国の父と呼ばれる孫文が日本の勝利について次のように言っていたのです「これは最近数百年間におけるアジア民族の欧州人に対する最初の勝利であります。この日本の勝利は全アジアで影響を及ぼし、アジア全体の諸民族は皆有頂天になり、そして極めて大きな希望を抱くに至ったのであります」実際に植民地にされていたアジアの国々に、独立への気概



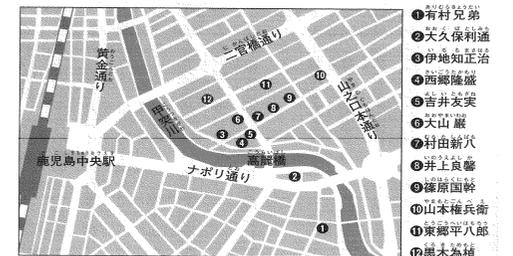
を与えることができた大きな出来事だったので。勝利できた要因は科学技術の積極的な採用と将兵の努力、それと外交努力による「日英同盟」の締結です。日露戦争勃発が必死となった1902年に締結できた日英同盟は、イギリス主導で結ばれた同盟でした。(日本はロシアとイギリスどちらにしようかと思案していたそうですが、...)イギリス全盛期にアジアの一小国だった日本がイギリスの初めての同盟相手になったことは世界の白人国家は驚きました。何故、そのようなことができたのか、そこには一人の日本人の存在がありました。柴五郎中佐。同氏は1900年に北京で起きた「義和団の乱」において日本と欧米10カ国の軍隊を指揮したのです。当時のイギリス公使が「日本兵の勇気と大胆さは驚くべきものだ。わがイギリス水平がこれに続く。しかし日本兵はずば抜けて一番だ」と言わしめたのです。そこから出てきた信頼関係が日英同盟と繋がったのと。日本人の勇気ある行動がイギリスを動かしたという事実です。

1859年 長州の思想家・吉田松陰

最後にこのような近代日本を作ることに貢献したと思われる人物についてです。まずは、吉田松陰氏。誰もが知っている松下村塾の塾長ですが、同氏が松下村塾で教えた期間は実質1年1ヶ月であったことをご存知でしょうか？その短期間に学んだ塾生の数は70名とも90名とも伝えられていますが、その塾生の中から2名の内閣総理大臣が誕生しています。初代総理大臣の伊藤博文氏、陸軍トップに上りつめた山縣有朋氏。他にも3名の国務大臣も生まれています。また、志半ばで倒れた歴史的人物も沢山います。いったい松陰氏何を教えたのでしょうか？

また薩摩藩の明治維新で活躍した偉人たちの多くが鹿児島市の中央、加治屋町という名の地区出身でした(下の図)。薩摩藩には「郷中教育」という独特の教育システムがあったそうです。今も語り継がれている3つの教えを教育の柱としています。「一、負けるな」「一、嘘をつくな」「一、弱いものをいじめるな」

松陰が短い期間に教えたもの、薩摩藩では狭い地域に歴史的に活躍する者が大勢いた事実。これらは、「人の未来は能力で決まるのではなく、志で決まる」このことを立証していると思います。本日同封させて頂きました「中小会社のサクセスストーリー」これはテクニックをまとめたものです。でも一番肝心なのは「志」。「志」を貫く武器としてご活用ください！



明治維新の偉人たちが誕生した地。鹿児島県加治屋町「高辺」